

イエスの聖テレサ（アヴィラの聖テレジア）の小品集『神への叫び』

Exclamaciones del alma a Dios

この作品は、サラマンカ大学の教授ルイス・デ・レオンによって、1588年に『靈魂の城』の付録として出版されました。タイトルは、「マドレ・テレサによって異なった日にちに執筆した神への靈魂の叫び・または靈魂の黙想。聖体拝領の後に御主と会話した心霊に従って。1569年」となっています。

この表題は、この作品についてすべてを含んでいます。しかし、残念ながらルイス・デ・レオンによって記録された日付は不正確です。それぞれの日付もありませんし、著者の聖体拝領との関係も記述されていません。事実、17の叫びの報告の中に、祭壇のご聖体への言及がありません。

この作品は、独白録の特徴を持っています。テレサは、聖アウグスチヌスの『告白録』や、カルトジオ会士のランドゥルフォ・デ・サホニアの著作『キリストの生涯』、また旧約聖書のヨブ記も聖グレゴリオ教皇の著作によって知っており、多くの靈的独白録に精通していました。

作品の内容は、具体的な読者との会話形式で書かれていません。それよりも自然発生的に靈魂の熱情を伝えます。この感情的な衝動から、彼女によって感じ取った靈的歩みが17個にまとめられます。

1. 「おお、生命よ、生命よ、おまえの「生命」から離れてどうして生きていくことができよう」(1:1)。これは彼女の生命に対する深い感性があふれ出ていますし、「死」を目の前にしています。すなわち、神不在の体験であり、神の憐みの不在の体験の叫びです。
2. 「おお、すべての人に生命を与える生命よ！ 求める者にあなたが約束されるあのきわめて甘美な水を、わたしにお拒みにならないでください。・・・わたしの神（キリスト）からほとぼしり出る生ける泉よ！ わたしたちを支えるために、なんと豊かにいつもあふれ出ていることでしょう」(9:2)。常にテレサはイエス・キリストの人間性に目を注ぎ、そこから生命をくみ取っていたことがわかります。
3. 「おお、わたしの靈魂の神よ、わたしたちはなんと早くあなたに背くので

しょう。しかし、あなたはもっと早くわたしたちをおゆるしになるのです」(10:1)。しかし、テレサは「罪」と「罪への傾き」を意識しています。この罪が、神の生命と私たちの生命を隔てていることを理解して叫びます。

4. 「わたしのより大きな恐怖は、すべての罰や私に現した地獄の猛威以上に最後の審判の日にあなたの神聖な怒りの顔を見なければならぬことです。・・・この悲嘆からわたしを救ってください。わたしがわたしの神を捨てることはありませんように」(14:2)。テレサは、未来に目を向け、この罪深い世の中での生活で、神の救いから外れないように懇願します。
5. 「もし、あなたを創造された方への愛と畏れに生きないならば、おまえはなんと自分の気まぐれな自由の奴隷になることだろう！ 至高の真理の無限の海の中に沈められている自分をみる幸いな日はいつ来るのであろう！ そこでおまえはもう罪を犯す自由がない、おまえはもう罪を犯すことを欲しない、なぜならば、地上のあらゆるみじめさから守られ、おまえの神の生命に同化されているのだから」(17:4)。テレサは、この神との生命の一致に向かっていることを、神の生命に飲み込まれる道を歩んでいることを知ります。
6. そして、テレサは言います。「今もなお、わたしは神にわたしの罪を告白し、主の憐みを公言したい。そこで、わたしは賛美の歌を作ろう」(17:6)。テレサは神の慈しみの歌を歌い続けます。

既に『自叙伝』の中に、テレサはこの神の不在を体験している報告をしています(自叙伝 30 章—31 章)。しかし、この神の不在の体験から、祈りの道ともいべき神との一致へ向かいます。『完徳の道』の 40 章から 42 章では、神への愛と畏れをもって真理のうちに歩むことが既に述べられています。このように彼女の他の作品と関連して読むと彼女の霊的歩みを知ることができるでしょう。

全体として、『神への叫び』は小さな祈りを構成し、テレサ的詩編となっています。単なる感情の流れではなく、時々、旋律とリズムを持ちます。

このテレサの作品について、オリジナルは保存されていません。いわゆる自筆原稿と言われるのも、ルイス・デ・レオンの出版した書物を加工したものです。

<参考図書>

1. イエズスの聖テレジア『小品集』、東京女子カルメル会・福岡女子おカルメル会訳、ドン・ボスコ社、1993年
2. TERESA DE JESÚS, *Obras completas*, Ed. Monte Carmelo, Burgos 2004, preparada por Alvarez Tomas